

タイトル	大学生による やさしい日本語 コンテンツ作成の試み - 振り返り感想文の分析を中心に -
著者	丸島, 歩; MARUSHIMA, Ayumi
引用	北海学園大学人文論集(73): 53-69
発行日	2022-08-31

大学生による〈やさしい日本語〉 コンテンツ作成の試み*

— 振り返り感想文の分析を中心に —

丸 島 歩

1. はじめに

「やさしい日本語」は1995年の阪神大震災の際に、在住外国人が必要な情報が得られないために二次的な被害を受けたことを反省に、日本語教育や社会言語学の専門家によって構築された日本語の文体である。語彙や構文を平易にすることで、日本語の運用能力が高くない人であっても情報を読み取ることができるように配慮されている。現在は〈やさしい日本語〉として、国や地方公共団体からの生活情報の発信やwebニュースなど、平時においても広く用いられるようになっている。また、ろう者や高齢者、小中学生など、外国人に限らず日本語での情報提示に配慮が必要な人への情報提供への活用の実践も広く行われつつある。

筆者は2021年度の1年間、北海道内の私立大学の人文学系の学科の3年生を対象とした演習の授業において、〈やさしい日本語〉を用いたコンテンツを作成する活動を行った。日本語教育学系のゼミであるものの、受講生は日本語に幅広い興味を持つ学生が多い。卒業後には中学・高校の国語

* 本研究は北海学園大学学術研究助成（個人・一般研究）の助成を受けたものである。また、2022年7月9日に行われた日本語教育学会北海道支部集会で行ったポスター発表「大学生による〈やさしい日本語〉コンテンツ作成の試み」をもとに加筆修正したものである。発表時に助言やコメントをくださった方々に感謝申し上げたい。

教員、公務員、民間企業など、多様な進路を志望しており、日本語教師など日本語教育に関わる職業を志望するものはほとんどいなかった。しかし、北海道を含め、今後外国人居住者が増えることが予想されることから、これからの社会のさまざまな場において、多様な人々の橋渡しになることができる人材の養成が必要であると考えた。それには〈やさしい日本語〉の技術を身につけることが有用であると考え、〈やさしい日本語〉を用いて情報発信をする活動を行うこととした。

大学が所在している地域の周辺は行政の文書等もある程度〈やさしい日本語〉化がなされている。また、大学内に留学生などの日本語を母語としない学生も少ない。このことから、学内や周辺地域の情報を〈やさしい日本語〉化することにそれほど大きな意義はないと思われた。また、幅広いことがらについて自ら伝えたいことが表現できるようになることも重要だと考えたことから、コンテンツのテーマは学生の自由とした。演習は昼間部学生向けと夜間部学生向けのクラスがあったが、この2クラスを合わせて19名で全員が日本語母語話者であった。

本論文では演習授業の流れを概観したのち、後期の学期末に受講生が書いた感想文を分析することで、〈やさしい日本語〉が受講生たちにどのような学びをもたらしたかについて分析し、〈やさしい日本語〉が日本語母語話者にとってどのような意義があるのかについて考察したい。

2. 演習授業の概要

前期のはじめの数回は〈やさしい日本語〉の基本的な理念や語彙、表記、構文などについて学んだ。その後各自のテーマを決め、それぞれのテーマに合うプラットフォームを検討したうえで、個人もしくはグループでコンテンツ作成を進めた。前期のスケジュールの抜粋を以下の表1に示す。なお、後期は第10回までをコンテンツ作成とそのまとめに用いた。

表1 前期のスケジュール（抜粋）

回	日	内容	詳細
1	4/13	ガイダンス	この授業の進め方
2	4/20	「やさしい日本語」の概要	「やさしい日本語」の成立と考え方
3	4/27	日本語の構文・文法と〈やさしい日本語〉	書き換え実践
4	5/11	日本語の語彙・表記と〈やさしい日本語〉	
5	5/18	〈やさしい日本語〉の活用方法を考える	QTF（質問づくり）のテクニックを用いる
6	5/25	適切なプラットフォームを考える	コンテンツを考えながら、それにふさわしい（＋実現可能な）プラットフォームを考える。単独で行うか、チームで進めるか
7	6/1	コンテンツの内容について考える	
8	6/8	〈やさしい日本語〉コンテンツの作成 A①(草稿)	コンテンツ作成。教員は適宜アドバイスを する。 授業の最後には、全員に向けて自分（のグループ）の進捗を報告する。
9	6/15	〈やさしい日本語〉コンテンツの作成 A②(修正)	
10	6/22	〈やさしい日本語〉コンテンツの作成 A③(完成)	
11	6/29	〈やさしい日本語〉コンテンツの作成 B①(草稿)	
12	7/6	〈やさしい日本語〉コンテンツの作成 B②(修正)	
13	7/13	〈やさしい日本語〉コンテンツの作成 B③(完成)	
14	7/20	コンテンツの統合、最終確認	
15	7/27	前期のまとめ	まとめ、後期の予告

前期の期間は北海道内等の観光地に関するテーマが多かった。読み手として日本に興味のある外国人が想定しやすかったためと思われる。後期は日本文学の紹介や要約に取り組む個人やグループが増えた。2020年度より道内の文学館の協力を得ており、教員による示唆もあったためと思われる。また、前期の取り組みを通して〈やさしい日本語〉で書くことに慣れたことで、幅広い内容に挑戦しようとする意識に繋がった可能性もある。

以下の表2に、作成コンテンツの一覧を示す。

表2 作成コンテンツ一覧

	昼／夜	学期	テーマ	人数	媒体
1	昼	前期	北海道の観光地①	3	Web サイト
2	昼	前期	日本の観光地	1	Web サイト
3	昼	前期	道の駅	1	Web サイト
4	昼	前期	北海道のグルメ	2	Web サイト
5	昼	後期	スタジオジブリ作品紹介	1	Web サイト
6	昼	後期	小林多喜二『蟹工船』要約	2	pdf ファイル
7	昼	後期	三浦綾子の紹介	3	Blog (note)
8	昼	後期	西條奈加の紹介	1	pdf ファイル
9	昼	後期	茨木のり子	1	Blog (note)
10	昼	通年	北海道の伝統文化	2	Twitter
11	昼	通年	住民票請求	1	Web サイト
12	昼	通年	助成金申請	1	Web サイト
13	夜	前期	北海道の観光地②	4	Web サイト
14	夜	後期	警報・注意報	1	pdf ファイル
15	夜	後期	石川啄木の短歌	1	Blog (note)
16	夜	後期	日本の家庭料理	1	Instagram
17	夜	後期	テーマパーク	1	Web サイト

コンテンツ発信の媒体は、Web サイト、Blog、SNS などそれぞれに合うプラットフォームを各々で選択した。コンテンツの作成・公開も、部分的に教員が取りまとめや協力をしたものもあったが、基本的には受講生自らが行った。

観光情報、生活情報など、読み手が web 検索でたどり着く可能性が高い情報では、媒体として web サイトの使用が選択されることが多かった。HTML などの知識がなくても作成が容易であることや、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス¹ が付与された画像が埋め込める機能もあることか

¹ 文書、画像、映像などの作者が、作品を二次利用する条件を意思表示するためのツールである。Google サイトではこのライセンスに基づいた画像をサイト内に提示できる機能があるため、サイト制作者が直接著作権者に画像の二次利用の許可を得たり、手作業でライセンスの付与された画像を探し

ら、すべてのグループや個人が Google サイトを採用した。ただし Google サイトはフォントの選択肢が少ない²、ルビが振れないなどの制約もあったため、漢字とひらがなのバランスを考慮する必要があった³。

Blog はメディア投稿プラットフォームの note (<https://note.com/>) を用いた。2020 年度にゼミ名義のアカウントを取得し、石川啄木に関するコンテンツを作成・公開していたため、文学関連のコンテンツに限ってゼミ名義のアカウントの使用を認めた。登録しているクリエイターが公開した写真やイラストを記事内で使うことができること、文書にルビが振れることが利点である。また、テキストをはじめとするメディア投稿プラットフォームであることから SNS 的な性格も持ち合わせていることも、良い影響をもたらした。文学には関心があるものの、〈やさしい日本語〉には馴染みのないユーザーからの反応が得られた点である。

レイアウトが重要なコンテンツや、教材や読み物としての利用が想定されるものは、Microsoft Word などを用いて pdf ファイルとして出力し、ゼミの web サイトで公開した。ユニバーサル・デザイン・フォントや教科書体フォントが使える、ルビも好きな大きさに付すことができる点が利点である。その一方で、pdf ファイルを表示できる Web ブラウザを用いるか、ファイルをダウンロードして pdf 閲覧ソフトウェアやアプリケーションを

たりする手間が省ける点が利点である。

² 日本語学習者向けの初級教科書のほとんどは教科書体で書かれていること、手書きの文字に比較的字形に近いことから、日本語の初学者を対象にするのであれば教科書体での提示が望ましい。また読字障害を持つ読み手を想定するのであれば、ユニバーサル・デザイン・フォントを選択したいところである。しかしコンテンツ作成時において Google サイトでは、基本的な機能の範囲では教科書体やユニバーサル・デザイン・フォントは選択できない仕様になっていた。

³ 漢字を完全に排除すると特に漢字圏の学習者などはかえって読みづらくなるおそれがあること、括弧で読み仮名を添えると見た目が煩雑になることなどから、漢字や読み仮名の有無のバランスを考慮する必要があった。

用いるなどしないと、読むことができないというデメリットもある。

教員による添削を含めた作業工程は、コミュニケーションアプリの Discord で共有した。対面での演習が行うことができた期間は、演習内で各グループが口頭で進捗の報告を行っていたが、コロナウイルス感染症の影響で対面での演習が行えない間は、この報告も Discord 上で行っていた。これにより、滞ることなく情報共有や原稿の添削・修正を行うことができた。

学期末に学生が作成したコンテンツの一部を機関誌としてまとめ、公立の文学館で自由に手に取れるよう配布した。また、ゼミの Web サイトに pdf 版を掲載した。閲覧者の多くは日本語教育関係者や日本文学に関心を持つ人だと思われる。

3. 振り返り感想文の分析①オープンコーディングによる分析

後期の学期末に1年間の振り返りのために、活動の感想を400字程度で書いてもらった。そのなかに、担当教員である筆者が意図していなかった学びが学生に起きていたことが推測できるような記述が散見された。そこで、この感想文を質的に分析することで、受講生が〈やさしい日本語〉でのコンテンツ作成を通して何を学んだのかを明らかにすることを試みた。まずはオープンコーディングの手法を用いた分析を行うこととする。

3-1. 分析対象と方法

3で述べた感想文は、17名から提出があった。学生から研究利用への許可を得たのち、すべての記述を111センテンスに分割した⁴。それぞれのセンテンスに対して、佐藤(2008)を参考に、オープンコーディングの手法を用いて質的な分析を行った。まずはセンテンスごとにオープンコー

⁴ 原則的にセンテンスごとに分割したが、1センテンスのみ重文の前後で全く異なる内容が書かれていたことから、この文に関しては2つに分割した。

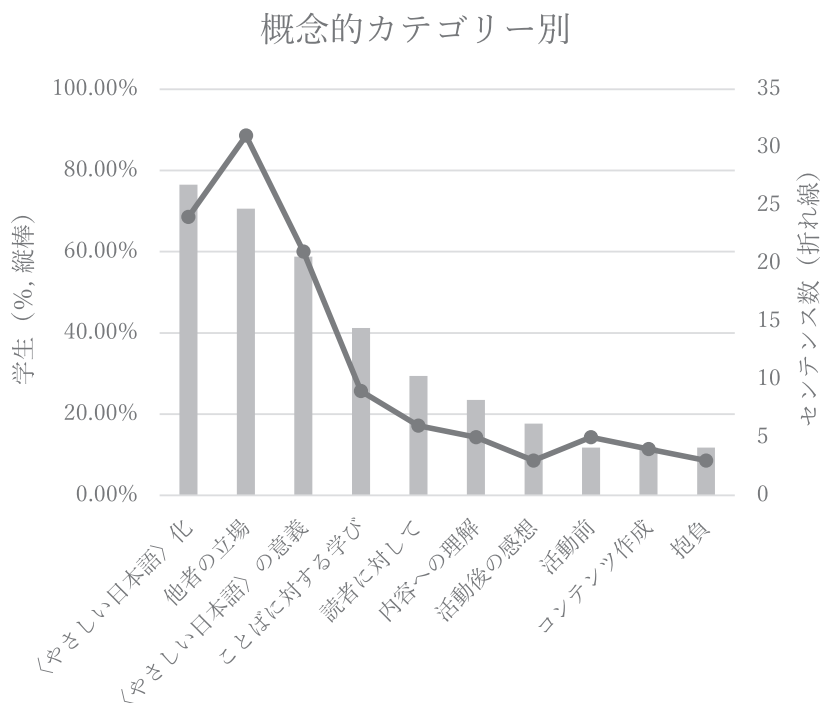


図1 概念的カテゴリー別 学生割合 (%)・センテンス数

ディングを行い、そこから焦点のコードを抽出した。さらに原文の記述を参照しつつ、10の概念的カテゴリーに割り振った。

3-2. 結果

概念的カテゴリーとしては、「他者の立場」「〈やさしい日本語〉化」「〈やさしい日本語〉の意義」「ことばに対する学び」などが抽出された。図1に、概念的カテゴリー別の学生の割合、センテンス数を示す⁵。「〈やさしい日

⁵ 段落に基づいた分析を行うには感想文の長さが短いことからセンテンスごとに分析を行ったが、複数のセンテンスを用いて1つの内容をあらわしているものも多いことから、センテンス数は参考の数値として扱うことにす

本語〉化」,「他者の立場」,「〈やさしい日本語〉の意義」については過半数の学生が触れている。

以下では, 主要な概念的カテゴリーの詳細について見てゆきたい。

「〈やさしい日本語〉化」の概念的カテゴリーには, 「〈やさしい日本語〉で書くことの難しさ」「〈やさしい日本語〉化での知識・技術」などの焦点的コードが含まれる。「〈やさしい日本語〉の意義」の概念的カテゴリーには「〈やさしい日本語〉の意義」「多くの人が〈やさしい日本語〉を知るべき, 使うべき」などの焦点的コードが含まれていた。〈やさしい日本語〉の意義については, 〈やさしい日本語〉の成立や展開とともに前期の演習の初期で前提知識として文献購読を通して学び, 「〈やさしい日本語〉化」における文章作成の技術や工夫についてはほぼ1年を通して学生たちが向き合ってきた。それゆえ, 振り返りの中に多く現れるのは自然なことであると言える。

しかし, 「他者の立場」に立つことの重要性は, 授業内であまり明示的に示して来なかった。「他者の立場」の概念的カテゴリーの中には「ふだんの日本語は非母語話者には難しい」「非母語話者の気持ちや立場を想像」のような焦点的コードが付されたものが多いことから, 非母語話者を意識した記述が多いことがわかる。〈やさしい日本語〉での情報提供の対象は日本語非母語話者だけではなく, 知的障がい者や高齢者, 小中学生等も想定されているが, 教員である筆者が主に日本語教育における語彙や文法の指標を基準として添削や指導を行っていたために, 非母語話者の立場に立つような記述が多かったものと思われる。これ以外にも「自分にとってはやさしくても他人にはやさしくない」「誰にでもわかるように」などの焦点的コードもあり, 日常的に用いていることばを逸脱することで, 自分とは異なる環境や背景をもつ人の立場を考えるに至っていることがうかがえる。さらに, ことばを越えて他者の立場を想像したことに言及するような記述

る。それぞれの概念カテゴリーに分類できる記述を行った学生がどの程度いたかを重要視して分析を行う。

も見られた。このことから、「多様な人々の橋渡しになることができる人材の養成」という当初の目的はある程度達成できたと言えるだろう。

「ことばに対する学び」の概念的カテゴリーについては、「日本語そのものへの気づき」「自らの言語能力向上に繋がる」のような焦点的コードが含まれていた。やさしく書くことを通して、簡潔にわかりやすく伝えること、文の構造を意識すること、新たな語彙との出会いに繋がったことがうかがえる記述が見られた。この点においても、教員が意図しなかった学びが起きていたことが示唆された。

比較的言及している学生が少なかった概念的カテゴリーについても触れておきたい。「読者に対して」の概念的カテゴリーは、作成したコンテンツを読むであろう読者に対する期待や希望を述べたものである。そのほとんどが「日本語・日本文化への理解に繋がって欲しい」という焦点的コードが付されたものであった。ここで言う「日本文化」には、学生がテーマとして選んだ文学作品や、北海道の名所や観光地が含まれる。「内容への理解」の概念的カテゴリーはそのすべてが「〈やさしい日本語〉化で内容への理解が深まる」の焦点的コードが付されたものであった。〈やさしい日本語〉でリライトしたり修正を繰り返したりすることで、自身の内容への理解が深まり、伝えたいことが明確になっていくことを実感しているというものであった。「活動後の感想」の概念的カテゴリーに分類されたものは、活動や自身の作成したコンテンツを振り返ってポジティブな感想を記述したものであった。「活動前」の概念的カテゴリーは、活動前の〈やさしい日本語〉に対する理解の不足や、外国人に自分の日本語が伝わらなかった経験などが記されていた。「コンテンツ作成」の概念的カテゴリーには、コンテンツ作成の手順や著作権への配慮について書かれたものが含まれていた。「抱負」の概念的カテゴリーには、「課題」「今後も〈やさしい日本語〉を使いたい」の焦点的コードが付されている。

「〈やさしい日本語〉化」「他者の立場」「〈やさしい日本語〉の意義」には多くの学生が触れている一方で、それ以外については受講者それぞれの多様な学びがうかがえる結果となった。

4. 振り返り感想文の分析②テキストマイニングによる分析

4-1. 分析対象と方法

3と同じ資料を、テキストマイニングソフトのKH Corderを用いて分析した。前述のオープンコーディングの手法ではセンテンスごとの分析を行ったため、より大局的に記述の内容を分析する必要があると考えたためである。分析を行う前に、表記ゆれを統一した。具体的には、「非日本語母語話者」「母語話者以外」「日本語が母語ではない人」「外国の方」をすべて「外国人」に統一している⁶。さらに、出現頻度の多い複合語やテクニカルタームをあらかじめ強制抽出する語として指定した。強制抽出する語として指定したのは、「やさしい日本語」「外国人」「日本語母語話者」「外国語」「日本語学習者」である。

まず頻出語を示すことでテキストの特徴を概観したのち、共起ネットワーク図を用いてどのような記述が多かったのかについて整理する。なお、頻出語は出現回数が10を超えるものを分析対象とする。共起ネットワーク図は集計単位を段落⁷とし、語の最小出現数を5に設定した。

4-2. 結果

まず、出現回数が10以上の語について、以下の表3にまとめる。最も多

⁶ 正確に言えば、「外国人」は日本国籍を持たない人を指し、「日本語が母語ではない人」のように母語を基準とした表現とは考え方が異なる。しかし、この感想文で書かれている「外国人」は「日本国籍を持たない人」ではなく「日本語を母語としない人」を指していると考えられることから、全て表現を統一することとした。統一表現として「日本語非母語話者」のようなより正確な表現を採用しなかったのは、長い複合語が分析の妨げになる危険性を排除するためである。

⁷ ここでの「段落」は受講生が感想文を書いた際の形式段落に相当するものではない。一人一人の受講生が書いた文章全体を一つの「段落」として扱っている。

かったのはこの実践のテーマとなっている「やさしい日本語」であった。次に多かったのは「思う」で、これは実践の感想を求めたために頻出した語である。7位の「感じる」、11位の「自分」、14位の「考える」なども同様であろう。3位の「日本語」はふだん使っている日本語の難しさや特徴への発見について述べているものが多い。5位の「難しい」は、ふだん使っている日本語の難しさや、〈やさしい日本語〉の書き換えの難しさについて言及しているものが多かった。6位の「文章」は、ふだんの日本語文章に対する発見や、〈やさしい日本語〉化した文章への感想を述べているものが多かった。8位の「外国人」は3-2節で述べた「他者の立場」の概念的カテゴリーでも見られたように、外国人や日本語を母語としない人の立場に立って考えたことを示す記述で多く用いられていた。9位の「人」は〈やさしい日本語〉を知らない人や必要としている人に、〈やさしい日本語〉が広まっていくことを期待するような文で多く用いられていた。12位の「伝わる」、18位の「語彙」、21位の「伝える」「表現」などのように、わかりやすい文章を作成するために日本語と向き合ったことが推察される語も比較的多く出現していた。

表3 出現回数10以上の語

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	やさしい日本語	81	11	伝わる	15
2	思う	37	13	使う	14
3	日本語	34	14	考える	13
4	活動	33	15	紹介	12
5	難しい	32	15	必要	12
6	文章	25	15	用いる	12
7	感じる	22	18	語彙	11
8	外国人	19	18	作品	11
8	人	19	18	理解	11
10	知る	16	21	伝える	10
11	自分	15	21	表現	10

次に、共起ネットワーク図を図2に示す。第1サブグラフには「やさしい日本語」「感じる」「人」「知る」「自分」「考える」「必要」「多く」の語が共起している。「やさしい日本語」「感じる」「自分」「考える」に関しては、この活動の感想を述べる際に多く用いられると考えられる語である。一方、「人」「必要」「多く」については、〈やさしい日本語〉自体の必要性、〈やさしい日本語〉を必要としている人がいること、〈やさしい日本語〉を多くの人に知って欲しいという期待などが記されている文面に多く出現していた。この内容は3-2節で述べた「〈やさしい日本語〉の意義」の概念的カテゴリーにも通じるところがあり、やはり多くの受講生が〈やさしい日本語〉の必要性を改めて認識し、今後さらに広がっていくことを期待していることがうかがえるものである。

第2サブグラフには「文章」「簡単」「理解」の語が共起している。これらは〈やさしい日本語〉で文章を書く際に、読み手がより理解できるように簡単なことばや文法で書くことを心がけたことがうかがえるものである。これは3-2節で述べた「〈やさしい日本語〉化」や「他者の立場」の概念的カテゴリーに通じるところがあり、〈やさしい日本語〉でやさしく書くことを通して、他者の立場に立って考える機会が得られたと考えられる。

第3サブグラフには「外国人」「持つ」「文学」が共起していた。「持つ」は5回出現しているが、そのうち4つは「興味を持つ」という形で出現している。つまり、文学をはじめとする日本文化に興味を持って欲しいという期待が示されていると言えるだろう。3-2節の「読者に対して」の概念的カテゴリーに通じるものである。「北海道」「伝える」が共起している第5サブグラフも同様で、特に北海道の観光地について扱った受講生が、北海道の魅力が読者に伝わっていることを期待している文面で多く共起している語である。オンラインでの不特定多数に向けた情報提供であるものの、一部の受講生たちは読み手を強く意識していたことがうかがえる。

第4サブグラフでは「表現」「言葉」が共起しており、これらの語は日本語の表現や言葉に改めて向き合ったり、発見したりすることがうかがえる記述で多くみられたものである。3-2節での「〈やさしい日本語〉化」や

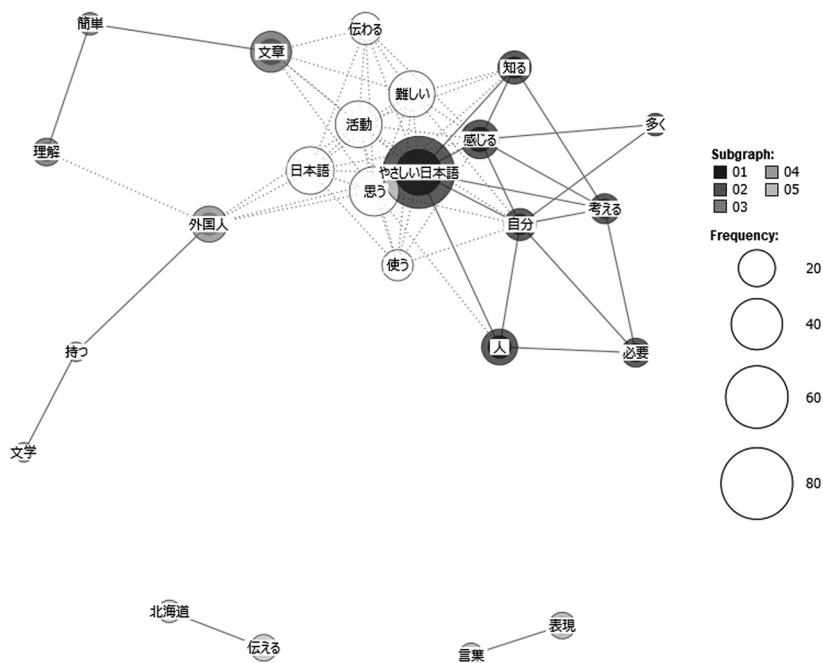


図2 共起ネットワーク図

「ことばに対する学び」の概念的カテゴリーに通じるものであり、ここからも一部の受講生たちが〈やさしい日本語〉での活動を通してことばについて改めて学ぶ機会になったことが推察される。

5. 考察

本稿では、オープンコーディングとテキストマイニングを用いて受講生の感想文の分析を行った。オープンコーディングでの分析では、「〈やさしい日本語〉化」「他者の立場」「〈やさしい日本語〉の意義」「ことばに対する学び」「読者に対して」などの概念的カテゴリーに分類を行ったが、共起ネットワーク図による分析結果と併せて考えると、これらのカテゴリーは独立しているわけではなく、相互に関連しているものもあると考えられる。

「〈やさしい日本語〉化」の概念的カテゴリーでは〈やさしい日本語〉でリライトする際の知識や技術、その難しさについて書かれているものが多かったが、共起ネットワーク図の分析によって、〈やさしい日本語〉で書くことが「他者の立場」の理解や「ことばに対する学び」に繋がっていたことが示唆される結果となった。共起ネットワーク図の第2サブグラフには「〈やさしい日本語〉化」と「他者の立場」に関連する語が共起しており、第4サブグラフには「〈やさしい日本語〉化」と「ことばに対する学び」につながる語が共起していたためである。演習の担当教員である筆者は「他者への理解」「ことばに対する学び」にはそれほど言及してこなかったが、〈やさしい日本語〉で書くことで得られる技術を通して、もしくは〈やさしい日本語〉で書くことの難しさに向き合うことを通して、受講生たちがより本質的な学びを得ていたことが示唆された。

「〈やさしい日本語〉の意義」については、前期の序盤の授業で文献購読などを通じて明示的に受講生に示したため、多くの学生が言及していても不思議ではない。しかし、学期末の振り返りで多くの受講生がこのことを思い返していることから考えると、一年間の活動を通して改めて「〈やさしい日本語〉の意義」を再認識していると考えられるだろう。

「読者に対して」の概念的カテゴリーは、共起ネットワーク図の第3・第5サブグラフと合わせて分析すると、受講生が作成したコンテンツを読んだ読者に対して、日本語や日本文化、もしくは北海道の魅力を知ってもらうきっかけにすることを期待する内容であった。作成したコンテンツがどの程度日本語の非母語話者に届いているかを追跡する手段はほとんどないが、受講生たちは非母語話者が読むことを期待していると見られる。

〈やさしい日本語〉が日本でのマジョリティである母語話者にもたらす意義について、庵(2016, 2019)では「日本語表現の鏡としての〈やさしい日本語〉」を挙げている。自分が伝えたいことを、非母語話者を含めた相手に伝え説得することを通して、コミュニケーション能力を高める役割を担い得るという主張である。感想文の分析を通して、庵(2016, 2019)でも述べられているとおり、学生たちが〈やさしい日本語〉を通して、相手

に伝えることを強く意識したことが推し量れる。しかしそれにとどまらず、自分が普段使っている日本語を再発見することにもつながることや、他者の立場を推し量る態度を醸成していたことも見て取れた。

宇佐美（2019）は、現在〈やさしい日本語〉は日本語母語話者にとって多くの場合、外発的動機によって学ばれているが、外発的動機によって学習が始められた場合は環境の変化によって、学習が中断されてしまうことを指摘している。多くの人を動かすためには内発的動機を喚起することが重要であるとして、①参加者の人生と relevant である、②自分がやったことに対してすぐにフィードバックが得られる、③単に知識や技術が習得できるだけでなく、自己の問い直しにもつながる、をその3つの要素として挙げている。今回の実践は、多角的に情報共有することでフィードバックが得やすい環境にあり（②）、普段使っている日本語や自らの日本語能力を振り返る機会となっている（③）ことも明らかになった。しかし、必ずしも受講生の人生と relevant（①）ではない。それに関わらず、自分が発信する内容を自ら選択できたことで、〈やさしい日本語〉での情報発信によって内発的動機を自ら喚起することができていたと思われる。そのことは、オープンコーディングによる分析における概念的カテゴリー「読者に対して」や、共起ネットワーク図の第3・第5サブグラフにも表れている。一部の受講生は自ら発信した情報が必要な読者に読まれ、役立てられ、学びをもたらすことを期待していた。発信したものが誰かに読まれることそのものは、必ずしも受講者の人生に直接的に関わるものではない。それに関わらず、受講生たちはそこに自分なりの意義を見出していたと言える。

6. まとめ

大学生による〈やさしい日本語〉実践に関する報告は伊藤ほか（2020）、森（2020）などこれまでもあるが、自由度の高いコンテンツ作成を行ったものや、学生の振り返りからその学びを分析したものは管見の限り見られない。本研究の結果は〈やさしい日本語〉の実践が大学生にとって、〈や

さしい日本語》の技術のみならず、他者の立場に立って考えることやことばそのものの学びにも繋がっており、より本質的な学びをもたらし得ることを示すものであると考える。

今回の実践で、これまで述べたような教員が明示的に示して来なかった事柄についても学びが起こったこと、必ずしも受講生の人生に関わりの深いものではないにも関わらず意義が見いだされていたのは、学生たちがそれまでに広い視野で日本語や日本文化を学んできた素地があったためである可能性は十分に考えられる。今後は日本語や日本語教育の基礎的な知識のない母語話者に、〈やさしい日本語〉がどのように広い視野での学びをもたらすかを考えていく必要があるだろう。例えば文部科学省(2018)では、高校の国語科の内容のうち〔知識及び技能〕の言葉遣いの項目において、「敬語を含め広く相手や場に応じた表現や言葉遣いについて学習することを意図している(p.34)」と述べている。「相手や場に応じた表現」とは敬語などが想定されていると思われるが、日本語非母語話者をはじめとする多様な日本語使用者が今後いっそう増加し、関わる機会も増えることが予想されることに鑑みれば、〈やさしい日本語〉が日本語の社会における言葉遣いのバリエーションの一つとして選択される可能性も高くなる。高校生やそれよりも下の年代が〈やさしい日本語〉を学ぶ意義も今後高まっていくものと思われる。今後、高校生以下の年代に〈やさしい日本語〉をとおしてどのように言葉に対する深い内発的動機をもたらし得るかは、慎重に考えていく必要があるが、本研究で得られた知見がその土台の一つになり得るかも知れない。また、大学生以上の成人に対する教育においても、より効果的に内発的動機を喚起する工夫の余地もある。そのために今回の分析から得た知見を活用していきたい。

謝辞

演習授業で日本文学に関するコンテンツ作成を行うにあたり、新島短期大学の三成清香先生にアドバイスを頂いた。また、テーマ設定や成果物の公開に関して、市立小樽文学館や同美術館の方々、特に美術館の学芸員で

ある山田菜月氏にご協力を頂いた。この場を借りて御礼を申し上げたい。
また、感想文の研究利用を承諾してくれた演習の受講生たちにも感謝を述べたい。

参考文献

- 庵功雄（2016）『やさしい日本語—多文化共生社会へ—』岩波新書。
佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社。
文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』。
庵功雄（2019）「マインドとしての〈やさしい日本語〉—理念の実現に必要なもの—（第1章）」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・榊田直美（編著）『〈やさしい日本語〉と多文化共生』1-21. ココ出版。
伊藤（横山）美紀・高橋圭介・伊藤恵・相川健太・奥野拓（2020）「「やさしい日本語」の活用による「観光」と「学校」への貢献の可能性」『国際地域研究』2, 122-135。
宇佐美洋（2019）「母語話者にとっての〈やさしい日本語〉は学ぶに値するものか（第4章）」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・榊田直美（編著）『〈やさしい日本語〉と多文化共生』67-82. ココ出版。
森朋子（2020）「「やさしい日本語」による留学生のための防災案内の作成—多文化共生社会に多文化共生社会に必要な言語コミュニケーション能力を養成するプロジェクト—」『東京家政学院大学紀要』60, 185-193。

